

山崎賢人、37年ぶりケイリン王者 パリ五輪は補欠「まさか金が取れるなんて」

表彰台の真ん中に立ち、世界選手権王者に授与されるジャージー栄光のマイヨ・アルカンシェルをまとったのはパリ五輪はリザーブに泣いた山崎だった。抽選で先頭を回った決勝は勝負どころで2人にたたかれて3番手。最後方からまくり上げてきた選手にも先に行かれてしまう悪い流れだったが、それを追いかけ、その上をまくっての勝利だった。こぶしを突き上げての歓喜。「後手に回ってしまったから全開で行くしかなかった。行ったら行けてしまった感じです。本当にうれしい」。展開に左右されやすいのがケイリン。勝負強さを感じさせる勝利でもあった。

今回の世界選手権はパリ五輪からわずか2カ月余りでの開催。五輪を全力で戦った選手はリフレッシュ期間も経て臨んでいる。しかし、山崎は代表漏れが決まるとパリには帯同せず、ここ一本に絞って練習を積んできた。「みんな五輪を目指している中で僕だけは世界選手権。若い選手と一緒に練習してくれたのがありがたかった。これまで世界の舞台では結果を出せずにいたけど、やっと形になりましたね」。悔しい思いを知る仲間や関係者全員が祝福した。

気になるのは今後。すでに31歳。4年後のロス五輪を目指すか、ナショナルチームを卒業して競輪選手に戻るかは今回の結果次第としていた。だが、アルカンシェルを手土産に競技引退なんて周囲は許さないはず。「メダルが取れなかったら（進退を）考えるつもりだったけど、まさか金が取れるなんて。僕は力がない。だからもっと頑張らないといけない」。気持ちは再挑戦に傾いているのだろう。自慢のアフロヘアは今大会のベストヘア賞にも選出。日本人として34年ぶりのケイリン世界チャンピオンから目が離せない。

最年長 35歳の窪木一茂、スクラッチ優勝 男子中距離種目では初「逃げ切って単独で勝つのが最高」

日本人の世界チャンピオンが同日に2人も誕生した。ケイリン優勝は87年の本田晴美以来37年ぶり、窪木の優勝は男子中距離種目では初めての快挙となった。

ケイリンで山崎が優勝した直後に行われたスクラッチ。目の前で快挙を目にした窪木もその勢いをもらったかのように世界チャンピオンに輝いた。「信じられない。宿舎で同部屋の（山崎）賢人君の優勝が励みになったし、流れが来た。中野浩一さんからは（短距離以上に海外勢のレベルが高い）中距離で優勝なんて無理だよと言われてきたから感謝しかない」と、強化委員長の皮肉混じりの激励をモチベーション変えて見事に結果を残した。

60周、15キロを1位でゴールすればいいトラックのロードレースと呼ばれるスクラッチ。35歳のベテランは迷わず攻めた。残り40周あたりから激しくなった展開。しかし、その流れにひるむことなく果敢に飛び出して行った。「集団が崩壊しているのを見て自分から思い切り行った。単独でラップも決まった。スクラッチは逃げ切って単独で勝つのが最高

なんです。勝てる手応えはなかったけど、調子の良さは感じて走っていた」。豊富な経験による的確な判断が勝利をもたらした。

ナショナルチームでは最年長。年を重ねるごとに強さを増している世界チャンピオンは、これからも中距離チームを先頭で引っ張って行く覚悟がある。悔いが残っているのはこの日の前半に行われ、4位に終わった4000メートル団体追い抜き。「チームでメダルを取りたかった。今回はチャンスだったんです。でもやってきたことの自信は付いてきている。次の4年間で団体追い抜きの表彰台に上がるのが目標。今後は自分にも他人にも厳しくやっていきます」。この男がいれば世界の強豪と互角に戦える日は近いはずだ。

【デンマーク・バレラップ 八手亦和人】